成 果 報 告 書

1. 事業の題名

「 生涯の学びとしての、障害青年の『学校から社会への移行期』における継続的な学習の役割と課題 」

2. 委託事業の実施期間

平成 30 年 7 月 10 日から平成 31 年 3 月 8 日まで

3. 選択した研究テーマ（該当欄に〇を記入）

（ア）学校から社会への移行期	〇
（イ）生涯の各ライフステージ	

4. 実施組織の構成

（下記①②に必要事項を記載するほか、団体等の組織図など、組織体制の全体像が分かる資料を別途添付すること。）

①組織の主要構成員（役員等）

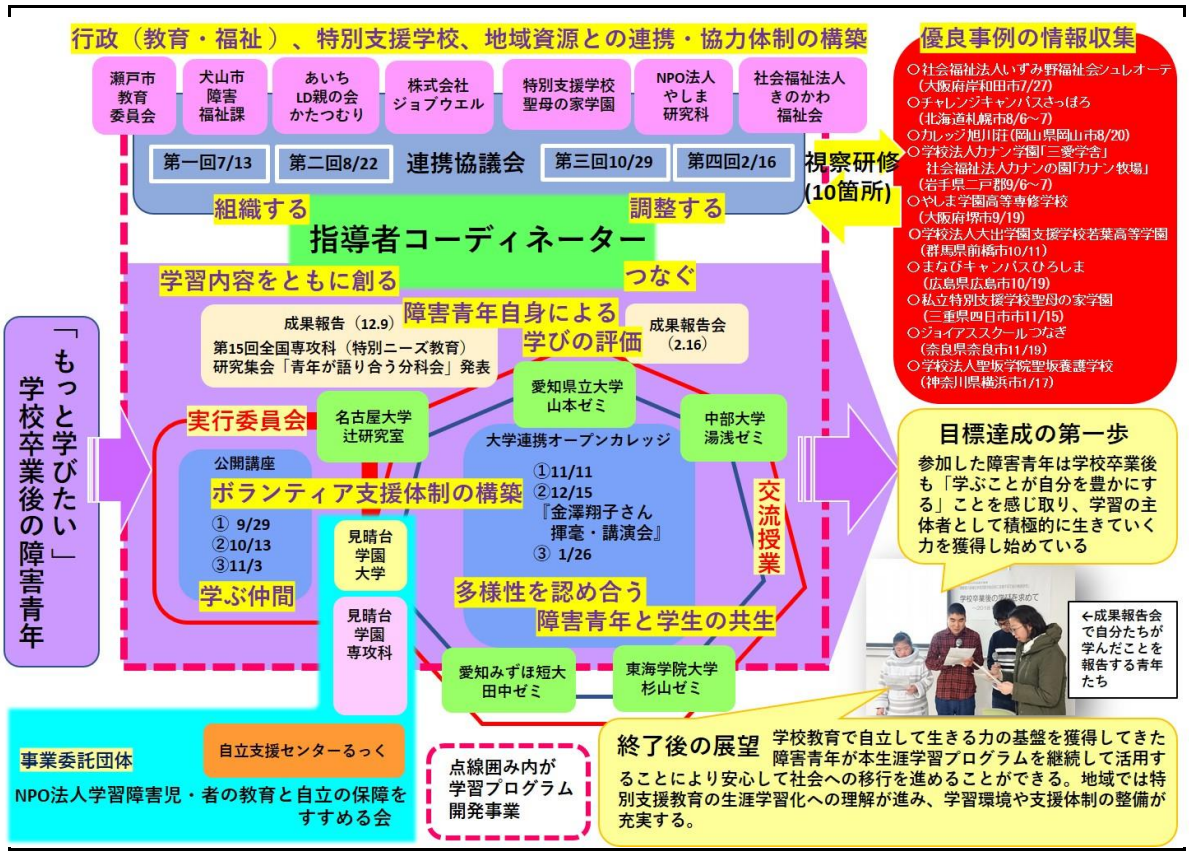
氏　名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
宮原とき子	理事長	
田中良三	副理事長	
尾頭嘉明	副理事長	
井上雅博	理事	
大竹みちよ	理事	
加藤哲	理事	
鬼頭美也子	理事	
齋藤大輔	理事	
斉藤智弘	理事	
澤田和男	理事	
谷口幸子	理事	
遠山哲男	理事	
服部憲治	理事	
水谷一郎	理事	
藪一之	理事	
長谷川勝彦	監事	
毛受和典	監事	

②事業推進担当者

氏　名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
大竹みちよ	NPO 法人学習障害児･者の教育と自立の保障をすすめる会見晴台学園大学教員	
平子輝美	NPO 法人学習障害児･者の教育と自立の保障をすすめる会見晴台学園大学教員	

5. 事業の実施に係る全体像

（連携先や再委託先までを含め、本実践研究事業の実施に係る全体像について図示すること。また、本事業全体を通じた目標の達成状況や、本事業終了後の目指す方向性等についても触れること。）



※別紙１にて拡大印刷してものを添付

6. 事業の実施結果

(1)効果的な学習プログラムの開発

①開発の実施経過

（具体的な内容は6.（1)②に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	第一回公開講座実行委員会(7/11)
8月	第二回公開講座実行委員会(8/22)
9月	大学連携オープンカレッジ実行委員会(9/8) 第三回公開講座実行委員会(9/13) 公開講座①(9/29) 第四回公開講座実行委員会(9/29)
10月	公開講座②(10/13)第五回公開講座実行委員会(10/13)
11月	公開講座③(11/3) 大学連携オープンカレッジ①(11/11) 第六回公開講座実行委員会(11/28)
12月	大学連携オープンカレッジ②(12/15)
1月	大学連携オープンカレッジ③(1/26)
2月	
3月	

この間に公開講座と大学連携オープンカレッジの運営にボランティアとして共に関わった大学等の連携を深めるため交流授業(6 回)を実施。

②具体的な内容

（効果的な学習プログラムに係る取組内容を具体的に記載すること。学習講座や活動等を開催した場合、実施スケジュールや内容、多様な者との交流や共同学習など共生社会の実現に向けた取組、障害者当事者の意見の反映や自主的な活動の促進、外部講師招聘及びボランティアスタッフ活用の有無、参加対象者のターゲット(障害種・属性・活動規模等を含む。)等を記載すること。また、結果として、効果的な学習プログラムを提示し、根拠とともに記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

1. 公開講座　※別紙 2 チラシ　参照

講座テーマは「私もあなたも Happy Life～考えよう!生涯輝き続けるために～」。

①名古屋大学辻研究室、見晴台学園、見晴台学園大学がコーディネーターの指導の元、公開講座実行委員会(計 6 回開催)を組織し、誰もが参加できる講座を準備する、②地域の障害者にも声かけを行い、幅広い学びの場とする、③参加者が主体的に学べるために、グループワークではチューター(辻研究室学生)を配置し、受講者の意見を反映できるように工夫する、の三点を基本方針に立てて取り組んだ。実施内容とスケジュールは以下の通りである。

第一回:9 月 29 日(土)名古屋港湾会館研修室　講座長:辻　浩(名古屋大学教授)

内容:オリエンテーション、パーソナルヒストリーを作ろう①

・公開講座の主旨を伝える。グループ分けを行い、自己紹介を行う。

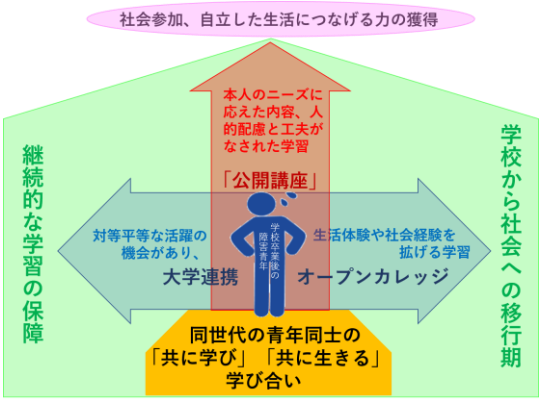
・パーソナルヒストリーの作り方の説明を行う。

・パーソナルヒストリー作成作業

第二回:10 月 13 日(土)名古屋港湾会館研修室　講座長:辻　浩(名古屋大学教授)
内容:パーソナルヒストリーを作ろう②
・パーソナルヒストリーを完成させる。
・グループでディスカッションを行い、まとめで報告する準備を行う。
・グループごとに報告をする。
・まとめ
第三回:11 月 3 日(土)愛知県立大学サテライトキャンパス　講座長:辻　浩(名古屋大学教授)
　　講師:高橋　智(東京学芸大学教授)
内容:いつでもどこでも誰もが学べる社会～北欧の教育事情から学ぶ～
・北欧の教育事情を学ぶ
・パーソナルヒストリーやこれまでのディスカッション、講義を経て、「いつでもどこでも誰でも学べる社会」について、グループディスカッションを行う
・講師によるまとめ

2. 大学連携オープンカレッジ　※別紙 3　チラシ　参照
　テーマは「共に学び、共に生きる」。コーディネーターの呼びかけで参加した愛知、岐阜の 6 大学等の学生と指導教授、そして公開講座にも参加した障害青年が対等な立場で関わり、金澤翔子氏(書家・文部科学省スペシャルサポート大使)の揮毫・講演会の企画と運営を担う活動を中心に据えて三回のシリーズで開催した。実施内容とスケジュールは以下の通りである。
第一回:11 月 11 日(日)愛知みずほ短期大学
内容:自己紹介、オープンカレッジの趣旨と内容の説明、書家の金澤翔子氏を紹介したビデオ鑑賞を経て当日翔子氏に質問したいことを自由に出し合う、役割分担の話し合い。
第二回:12 月 15 日(土)愛知みずほ短期大学
内容:金澤翔子氏と母親の泰子氏を招いての揮毫・講演会を開催。オープンカレッジの障害青年と各大学等からのボランティアが前回分担した、「受付」「接待」「会場設営」「司会」「質問」の五つの役割に分かれて講演会を進行した。終了後、アンケートに自己評価と講演会の感想を記入した。
第三回:1 月 26 日(土)愛知みずほ短期大学
内容:前回の講演会での自分たちの活動について当日の写真、アンケート記載の意見をもとに振り返りをした。次に次年度も同様に 6 大学等の連携を深め障害青年とともに一緒にオープンカレッジを創ることを確認した。そして実現させたい取り組みを全員がアンケートに記入して意見交換をおこなった。

　これらの取り組みから本事業により開発される効果的な学習プログラムは右図のように、障害青年と大学生等ボランティアの同世代の青年同士による「共に学び」「共に生きる」学び合いを土台に、「公開講座」のような本人のニーズに応えた内容、人的配慮と工夫がなされた学習と、「大学連携オープンカレッジ」のような障害青年にも青年として対等平等な活躍の機会があり、生活体験や社会経験を拡げることにつながる学習が相互に関連性をもって展開されることにより学校から社会への移行期の障害青年に継続的な学習を保障するものである。その根拠は 7.本実践研究事業により得られた成果・効



【図】効果的な学習プログラム（イメージ）

果に記載したように「公開講座」、「大学連携オープンカレッジ」、そして「成果報告」から得られた同世代の青年同士の「共に学び」「共に生きる」学び合いが、お互いの人間的成長に大きな教育力を発揮し、障害青年の自立や社会参加に不可欠であることが理解できたからである。

今後さらに検討すべき点や課題としては、実際に取り組む学習内容への障害青年自身の学習要求を反映させる方法の確立、大学生等ボランティアとの共同学習を恒常化するための大学間の関係の構築、が挙げられる。また、間接的な課題として特別支援学校高等部まで公的な教育が保障されてきた障害青年は一般に主体的に学習機会を求めて行動した経験に乏しい。そのため学習プログラムが用意されてもそこへの参加を促すには家庭、職場や利用している福祉事業所等の理解と後押しが不可欠である。同時に本人の経済事情に応じて学習に参加するための財政的な支援等環境整備も必要と考えられる。

（2）連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係機関・団体等との連携モデルの構築

①連携協議会の構成員

氏　名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
池田有希	瀬戸市教育委員会学校教育課指導主事(特別支援教育担当)	
牛丸基樹	あいちLD親の会かつむり代表	
奥谷雪江	犬山市障害福祉課課長補佐	
川上雅也	(株)ジョブウエル代表取締役	尾張東部地域相談センターアドバイザー(愛知県委託)
小畑耕作	社会福祉法人きのかわ福祉会理事	大和大学教授 全国障がい者生涯学習支援研究会副会長 全国専攻科(特別ニーズ教育)研究会副会長
杉山　章	東海学院大学准教授	人間関係学部
田中良三	愛知県立大学名誉教授	NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会・ 見晴台学園大学学長 本企画コーディーネーター
谷口 充	NPO 法人やしま研究科理事長	やしま学園高等専修学校校長
辻　正	特別支援学校聖母の家学園副校長	同学園元校長
辻 浩	名古屋大学教授	
藪 一之	NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会 見晴台学園学園長	
山本理絵	愛知県立大学教授	教育福祉学部長
湯浅恭正	中部大学教授	現代教育学部、大阪市立大学教授

②連携協議会事務局構成員（4. ②の担当者の兼務可。また、事務作業スタッフを除く。）

氏　名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
大竹みちよ	NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会見晴台学園大学教員	
平子輝美	NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会見晴台学園大学教員	

③連携協議会の開催及び効果的な実施体制・連携モデルの構築の実施経過

（具体的な内容は6.（2）④に記載すること。）

	連携協議会	視察研修
4月		
5月		
6月		
7月	第1回連携協議会(7/13)	社会福祉法人いずみ野福祉会シュレオーテ(7/27)
8月	第2回連携協議会(8/22)	チャレンジキャンパスさっぽろ(8/6～7) カレッジ旭川荘(8/20)
9月		学校法人カナン学園「三愛学舎」 社会福祉法人カナンの園「カナン牧場」(9/6～7) やしま学園高等専修学校(9/19)
10月	第3回連携協議会(10/29)	学校法人大出学園支援学校若葉高等学園(10/11) まなびキャンパスひろしま(10/19)
11月		私立特別支援学校聖母の家学園(11/15) ジョイアススクールつなぎ(11/19)
12月		
1月		学校法人聖坂学院聖坂養護学校(1/17)
2月	第4回連携協議会(2/16)	
3月		

④具体的な研究内容

（連携協議会における議論内容、検討結果等を記載するとともに、「どのような者と連携すると効果的な実施体制・連携が得られるか」等に関する分析・検証を行い、具体的な実施体制・連携等のモデルを提示すること。その際、自立や社会参加・就労等に関わる具体的なデータ・調査結果・事例等のエビデンスに基づく事業成果の分析・検証結果もあわせて記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

1.連携協議会の協議内容及び検討結果

第１回

（1）連携協議会規約
（2）本事業の趣旨と計画
（3）視察研修計画
（4）今後の日程
（5）その他
＜配布資料＞
資料 1-1：連携協議会委員名簿一覧
資料 1-2：連携協議会規約
資料 2-1：文部科学省・障害者学習支援推進政策
資料 2-2： 文部科学省・研究事業
資料 2-3： 企画提案書
資料 2-4： 三大事業（図）
資料 3：視察研修計画
資料 4：今後の日程

《検討結果》＊以下、『議事録』による。

議題に先立ち、遠山哲男(NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障を進める会前理事長)のあいさつと、資料 1-1 の掲載順に各委員の自己紹介、および委員長（山本理絵）と副委員長（湯浅恭正）の承認とあいさつがあった。

議題 1 連携協議会規約について【説明：田中】
資料 1-2 の本会規約の内容について確認をした。質問意見等はなかった。
議題 2 本事業の趣旨と計画【説明：田中、藪】
質問、意見として①成果報告の機会として挙げられている第 15 回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会では本人参加の分科会の一つ「青年の主張(仮称)」の中で発表してもらう時間がとれる(小畑)、②公開講座等へ参加してほしい障害青年がいるが就労しているので早めに内容等がわかるチラシなどを準備しては(奥谷)、③大学連携のオープンカレッジの日程は時期的にセンター入試などと重ならないよう早めに調整したい(杉山)が出た。②については公開講座準備会で検討している内容(日程、会場等)については早急に各委員にメールで伝える、③については次回連携協議会の議題として検討する、ことが確認された。また、学習プログラムに障害青年が交通費等を自己負担して参加することについては「声をかけにくい」等の意見があったので、今後の課題として連携協議会で議論していくことになった。
議題 3 視察研修計画について【説明：田中】
資料 3 をもとに視察研修計画について、事前に各委員にメールで希望を取り調整した計画の説明が田中よりあった。今回は前半 5 回の視察の日程と参加メンバーの確認を行い、後半 6 回についてはコーディネーターによる視察先との日程調整が済み次第順次委員にメールで連絡を入れ希望を取っていくことが報告された。また、各委員が少なくとも一回は視察に参加する方向で調整していくことが承認された。
議題 4 今後の日程【説明：田中】
資料 4 をもとに、次回第二回連携協議会と第四回連携協議会の日程について検討した。その結果、第二回は 8 月 22 日(水)13:30～、第四回は来年 2 月 16 日(土)9:00～18:00(成果報告会と連続して行う)いずれも会場は今回と同じく愛知県立大学サテライトキャンパス(ウインクあいち 15 階)に決定した。なお、第四回は本務の都合で山本委員長と辻正委員が欠席、湯浅副委員長が進行することが承認された。第三回の日程は次回の連携協議会で協議の上決定することも了承された。
議題 5 その他
事務局より①連携協議会委員への謝金・交通費は 4 回分をまとめて指定の口座に振り込むこと、②その金額については委託先本法人の規定に基づき設定し、次回連携協議会に書面で通知すること、が報告され了承された。

第 2 回

(1)視察研修の実施報告(前半)と今後の計画日程(後半)
(2)大学連携オープンカレッジ事業計画
(3)公開講座事業計画
(4)今後の日程
(5) その他
＜配布資料＞
資料 1-1：視察研修実施報告(前半)
資料 1-2：今後の視察研修計画(後半)
資料 2：大学連携オープンカレッジ事業計画 (三大事業図)
資料 3： 公開講座事業計画
資料 4：今後の日程
資料 5：文科省の委託事業先
《検討結果》
議題 1 視察研修の実施報告(前半)と今後の計画日程(後半)【説明：田中】
資料 1 に基づき視察研修計画後半の日程を確認、参加者未定だった視察のメンバーを決定した。続いてすでに終えた視察について参加者より一言ずつ報告があった。
議題 2 大学連携オープンカレッジ事業計画【説明：田中】
資料 2 をもとに本研究事業における大学連携のイメージを改めて連携協議会として確認した。オープンカレッジ開講に向けた各大学学生による実行委員会を①9/9(日)②12/15(土)③1/26(土)に設定したことについての報告と各大学間の連携として交流の日程や内容について現在の検討状況を報告し、了承された。
議題 3 公開講座事業計画【説明：藪】
資料 3、および別紙の公開講座チラシをもとに、3 回の公開講座の日程、会場、内容について報告があった。各連携協議会委員には受講生募集にあたりチラシを必要部数後日発送すること、また、本日の連携協議会終了後、同会場で 18 時より公開講座講師の辻浩氏、講座にボランティアとして関わる名古屋大学辻研究室の学生、事務局メンバー、およびコーディネーターの田中で公開講座のための準備会(2 回目)を行うことが報告され、了承された。
議題 4 今後の日程【説明：田中】
資料 4 をもとに、前回未定だった第三回連携協議会の日程を 10 月 29 日(月)13:30～16:00、会場はウインクあいち愛知県立大学サテライトキャンパスで行うことを提案、了承された。また、第四回連携協議会と成果報告会の日程が同じ日に設定されていることについて牛丸委員より質

問があった。田中コーディネーターから同日午前は成果報告会を行い、できるだけ連携協議会委員も参加して障がい青年の報告を直接聞き、それを踏まえて午後からの連携協議会で事業全体のまとめを行いたいと説明があった。

議題 5 その他

事務局より前回の報告通りに連携協議会委員への謝金・交通費について別紙「連携協議委員の協議会出席の謝礼と旅費、および視察時の日当と旅費について」が配布され、説明があった。特に視察研修における現地での立て替え払い(移動場面の交通費等)については必ず領収書を受け取り、事務局に提出していただくよう依頼があった。

第 3 回

(1)本事業の実施状況(中間報告)
(2)本事業に関わる文科省の「中間まとめ」
(3)今後の日程
(4)その他

＜配布資料＞

資料 1-1:公開講座
資料 1-2:大学連携オープンカレッジ
資料 2:文科省・有識者会議「学校卒業後における障害者の学びの推進方策(論点整理)平成 30 年 9 月
資料3:今後の日程(視察研修、第4回連携協議会など)

《検討結果》

議題 1　本事業の実施状況(中間報告)

① 「公開講座」・・第 1 回(9/29)終了、第 2 回(10/13)終了、第 3 回(11/3)開催予定【報告:辻 浩】
② 「大学連携オープンカレッジ」・・第 1 回 11/11、第 2 回 12/15、第 3 回 1/26 開催予定【報告:藪】
③ 「視察報告」 資料 3 に基づきこの間実施した(4)～(7)の視察報告がった。【報告:参加した各委員から】

以上の報告を了承した。

議題 2 本事業に関わる文科省の「中間まとめ」【説明:田中】

犬山だと障害者青年学級の経験もなく、公民館でどう整備していくのか、などいろいろ考えさせられた。市としての予算措置も含めて。(奥谷)
犬山市が福祉計画に障害者の生涯学習を盛り込んだことは文科省でも評価されている。本連携協議会参加を契機に犬山市や瀬戸市が全国で先駆けて取り組んでほしい。(田中)
私たちの地域では地域活動支援事業所が平日昼間にサロン的に取り組んでいる感じだが、我々は独自に土日の青年学級もやっている。地活を使って土日の活動を作ってくれると平日働いている障害者が参加しやすい。(小畑)
新たな事業に福祉の事業所が取り組むと職員の勤務の関係で厳しい。(奥谷)
中間まとめでは「学習」という言葉が強調されているが、余暇的なものがもっとあってもいいのでは(山本)、との意見があった。

議題 3　今後の日程【説明:田中】

資料 3 をもとに、今後の視察日程(三か所)、公開講座・大学連携オープンカレッジカレッジの日程、成果報告会①,②の日程を確認した。成果報告①については第 15 回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会和歌山大会の分科会 5「青年達が語り合う分科会」で 20 分程度時間をとって行う旨補足説明があった

第 4 回

(1)2018 年度本事業のまとめ
(2)来年度の事業計画予定
(3)その他

＜配布資料＞

資料 1　文部科学省・障害者学習支援推進政策の推進状況
資料 2　『平成30年度 事業報告書』(案)
資料 3 「2019 年度事業計画」(案)

《検討結果》

議題に先立ち、委託事業終了にあたり委託先法人を代表して理事長よりあいさつがあった。また、山本委員長の都合(遅刻)により、湯浅副委員長が議事を進めることを承認した。

議題1　平成 30 年度本事業のまとめ【説明:田中】

当日午前に開催した「成果報告会」の様子を紹介。「ワークショップで難しい漢字や言葉を助け合いながら自分のハッピー探しを考えられて良かった」、「(ボランティアの)大学生と一緒に学んで楽しかった」「役割をしっかりできて金澤翔子さんの講演会がうまくやれた」、「目の前で大きな習字を見てすごいと思った」等、障害青年自身が学習プログラムに参加したことを肯定的に捉

え、達成感を感じている発言を聞くことができた。視察研修で得た知見もフィールドバックさせて、次年度へつなげていきたい。

また、今年度中に、「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」から『報告』が出る予定だが、この障害児・者教育施策の大きな転換期に本実践研究事業の成果をしっかり結び付けて障害者の生涯学習の充実を図って行きたい。また、事業終了にあたり、3 月8日提出期限の報告書の作成に取り組んでいるので視察報告が未提出の方は提出してほしい、と依頼があった。

以下、関連して、「8 年前『学びの作業所』開設時に福祉では「学ぶ」という言葉はふさわしくないと指摘を受けた。そのあたりのことが今後は肯定されると理解して良いのか」【小畑】、「理解を得て使いやすくなることはあり得るが教育行政と福祉行政それぞれの専門用語については慎重に取り扱うべき」【田中】、「放課後デサービスを経験した保護者たちは学校卒業後にも同種のものがあればと思っている」【川上】、「気になっているのは就職に特化した移行支援ばかりで、活動の内容に障害者にとっての学びを大事にすることが反映される政策になってほしい」【牛丸】、「障害のある当事者がカリキュラムというかプログラムそのものを考える視点がほしい」【湯浅】の感想や質問が出された。

議題 2 来年度の事業計画案【説明：田中】

（資料 3-1、3-2）先日文部科学省から平成 31 年度の実践研究事業公募が示された。法人としては三年継続して本事業に取り組む考えで現在、3 月 5 日提出期限の申請書作成に取り掛かっている。資料にあるように学習プログラム開発については今年度の取り組みを継続・進展させる。視察研修の件数は減るが、次の中部地区フォーラム開催を念頭に置いて視察先を検討したい。平成 31 年度の公募内容には新たに『広域的な研究成果普及・人材育成等を目的としたブロック別コンファレンス事業の取組』が追加された。本年度委託を受けた 18 団体で中部地方は 2 件なのでコンファレンス事業についても申請する方向で考えたい。資料 3-2 の「障害者の学びの場づくり」フォーラム in 中部（案）がそれにあたる。連携協議会は今年度同様の回数で開催し、委員には引き続き来年度もお願いしたい。また、現委員には、来年度も引き続き連携協議会委員をお願いしたいまた、今年度「公開講座」の名称で行ったプログラムを来年度は「生涯学習セミナー」に変更し法人内外の他の社事業所を利用している障害者の参加や職員の支援を求めていきたい旨、説明があり、了解された。コンファレンス事業の案に対し事例報告者として推薦したい人がいるとの意見が出され【牛丸】、をコーディネーターに集約することで了承された。

議題3 その他

特になし

事務局より連携協議会参加のための交通費・日当の支払いについては 2 月 20 日頃に指定された口座に振り込むこと、合わせて領収書を郵送するので 2 月末必着で返信してほしいとの依頼があった。

2. 連携協議会委員体制の分析・検証

連携協議会委員は、本事業に関わる地域の障害者の教育・福祉・労働の行政機関、組織・団体の指導的立場にある人、大学の教授等で構成した。障害青年の学校から社会への移行期の学びの場づくりに関して、3つの事業に取り組んだ。

一つは、障害青年同士及び障害のあるなしにかかわらず、同年齢の青年たちが「共に学ぶ」ことを目的とした。そのため、多くの大学教員に連携協議会委員になっていただいた。

「公開講座」事業（テーマ“私もあなたも Happy Life～考えよう！生涯輝き続けるために～”。3 回実施。青年 23 名、名古屋大学学生・大学院生 7 名---チューターとして参加、東海学園大学 2 名:教員 1 名、学生 1 名、愛知県立大学大学院生 1 名、講座長 1 名:名古屋大学教授、見晴台学園教員 1 名、事務局 5 名、合計 40 名）では、講座長を務めた名古屋大学の辻教授は、障害青年の人間的自立への前向きな姿に接し、また、学生・院生たちの深い学び・成長に驚き、本事業の教育的効果を高く評価している。

「大学連携オープンカレッジ」事業（テーマ“共に学び・共に生きる”、全体交流 3 回、個別交流 5 回）では、7大学等の学生が障害青年を中心に共に取り組んだ。知的・発達障害学生が、一般の大学生と共に学ぶ姿や、書道家の金澤翔子さんへの質問項目を積極的に出し合う知的・発達障害学生の姿に、連携協議会委員はじめ参加者は一様に瞠目し、障害のあるなしに関わらず、「共に学ぶ」ことの可能性と、大学等の学びの場で、授業内容等を工夫することの大切さに気付かされたという意見が多かった。

二つめは、連携協議会委員には、「障害者の学校から社会への移行期」の実践に、直に触れて学んでいただき、本事業へのアドバイスと共に、各自の地域・大学等で何が可能かを考えていただくために、「視察研修」事業に取り組んだ。そして、視察研修後、報告書を提出していただいた。

報告書には、例えば、次のように書かれている。

市の障害福祉行政に関わる連携協議会委員は、「今回は重度知的障害者の『心の豊かさにつながる学びの場』を見ることができた。重度知的障害者対象であれば、生活介護での支援は可能であり今回の学習内容も適していると思った。働く意欲や自分の選択する意思など大切な個人の思いである。発達障害者や軽度障害者、身体障害者など他障害者や軽度障害者への支援につ

いても知りたいと思った。先進的な取り組みを実施している事業所見学は大変参考になり、市内事業者も良い部分を取り入れて実施できると良いなと思った。」と記述している。

また、市の教育行政に関わる連携協議会委員は「一人で頑張ることができる力をつけることは、学校のみんなで楽しいことをやったものだけが得られる。ここに入学してくる人は、発達障害があったり、適応障害があったりする。仲間をつくることが苦手な人が、環境の調整をおこなうことで、自らもっている力を存分に発揮して、いきいきと仲間と関わって活動をしていた。働くことは大事であるが、その前に等身大の自分を知り、自己決定することができる力を育てていく必要があると感じた。主体的に活動できるように、学校卒業後の障害者が学ぶ場をつくっていくことが間違いなく必要であると感じた。」と記述している。

以上から、本事業では、上述した連携協議会のメンバーの構成による実施体制と各連携協議会委員の本事業への積極的参加によって本事業はその目的を十分に達成することができた。よって、本事業は、連携協議会の実施体制や在り方についての一つのモデルを提供していると思われる。

3.連携協議会の今後の課題

連携協議会を単に諮問機関や協議機関としてではなく、事業毎に各委員の役割・担当を明確にし、事業の終了後の各事業報告では、各自の担当や役割について、また、自分の地域や持ち場での課題も含めた総括をしてもらうことによって、具体的に地域における障害者の学びの場づくりが進展するとともに、事業終了後の連携・協働が期待される。

（3）コーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策等の開発

①コーディネーター・指導者

氏　名	所 属 ・ 役 職 等	備考欄
田中　良三	愛知県立大学名誉教授、 NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会見晴台学園大学学長	

②開発の実施経過

（具体的な内容は6.（3）③に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	大学教員との打ち合わせ→東海学院大学・杉山先生（7/6）、愛知県立大学・山本先生（7/9）、名古屋大学・辻先生（7/11） 第1回連携協議会（7/13）→「公開講座」「大学連携オープンカッレジ」事業に担当及び学生の参加を要請
8月	第2回連携協議会（8/22）→「公開講座」「大学連携オープンカッレジ」事業に、担当及び学生の参加を確認
9月	公開講座（第1回・9/9）→事前（7/11、8/22、9/12）及び、事後(9/29)に担当の大学教員と参加学生・院生と事務局の実行委員会 大学連携オープンカレッジ（個別・愛知県立大学）→見晴台学園での授業・交流
10月	公開講座（第2回・10/13）→事後(10/13)に担当の大学教員と参加学生・院生と事務局の実行委員会
11月	公開講座（第3回・11/3）→事後（11/3、11/16)に担当の大学教員と参加学生・院生と事務局の実行委員会 大学連携オープンカレッジ①（共同、11/11）→大学教員と参加学生・院生 大学連携オープンカレッジ（個別・名古屋大学、11/30）→辻研究室との交流

12月	大学連携オープンカレッジ②（共同、12/15）→大学教員と参加学生・院生
1月	大学連携オープンカレッジ③（共同、1/19）→大学教員と参加学生・院生 大学連携オープンカレッジ（個別・愛知みずほ短期大学、1/9）→鈴木先生の授業 大学連携オープンカレッジ（個別・東海学院大学、1/16）→杉山ゼミとの交流 大学連携オープンカレッジ（個別・中部大学、1/24）→湯浅ゼミとの交流
2月	成果報告会②→大学連携オープンカレッジ（共同）担当の大学教員と参加学生・院生による発表
3月	

③具体的な内容

（コーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策に係る開発結果等を記載すること。また、コーディネーター・指導者の適性や人材配置・活用のモデル等を具体的に提示すること。その際、「どのような専門性を有する者がコーディネーター・指導者の役割に適しているか」、「具体的にどのように配置・活動すべきか」等に関する見解もあわせて記載すること。なお、開発結果を踏まえ今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

（4）成果等の普及

①実施経過

（具体的な内容は6.（4）②に記載すること。）

4月	
5月	
6月	
7月	
8月	
9月	
10月	
11月	
12月	成果報告会①(12/9)第 15 回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会 in 和歌山 第 5 分科会「青年が語り合う分科会」報告
1月	
2月	成果報告会②(2/16)
3月	報告書発行

②具体的な内容

（成果等の普及に係る取組内容を具体的に記載すること。成果報告会等のフォーラム等を開催した場合、実施スケジュールや内容、参加者のターゲット（自治体・関係団体・一般等）等を記載すること。（参加者実績については、下記表を参考に記載すること。）なお、取組の結果を踏まえて今後さらに検討すべき点や課題等についても触れること。）

①成果報告

平成 30 年 12 月 9 日(日)9:15～11:45

第 15 回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会　第 5 分科会「青年達が語り合う分科会」報告

会場　和歌山県立情報交流センターBig U

上記集会には本学習プログラムの「公開講座」「大学連携オープンカレッジ」に参加した障害青年 4 名と学生ボランティア 1 名が参加した。分科会内での成果報告の内容は、すでに終了した「公開講座」の振り返りと翌週に金澤翔子氏の講演会を控えて準備を進めている「大学連携オープンカレッジ」のこれまでの取組について。同世代の障害青年、障害児教育・福祉関係者が集う集会内で文科省委託事業として学校卒業後の障害者の生涯学習の必要性と意義を参加した本人たちのことばで発信することができた。

②成果報告会《学校卒業後の学びを求めて～2018 年度実践報告～》

平成 31 年 2 月 16 日(土)10:00～12:00

会場　名古屋市中村区名駅ウインクあいち 15F 愛知県立大学サテライトキャンパス

本事業終了にあたりコーディネーター、連携協議会委員、「公開講座」・「大学連携オープンカレッジ」に参加した障害青年・大学院生、事務局、当法人関係者が出席して上記成果報告会を開催した。初めにコーディネーターから文部科学省が「学校から社会への移行期」に着目し「障害者の学校卒業後の学びの支援」政策を進めている報告と、その実践研究事業の委託を受けて今年度学習プログラムの開発に取り組んできた経緯や内容が紹介された。

報告は公開講座と大学連携オープンカレッジに分かれて行われ、障害青年たちがそれぞれの取り組みの様子やアンケート等で集めた参加者の感想を資料とパワーポイントを使って紹介した。公開講座は講座長を務めた連携協議委員からは「グループ単位でのワークショップの場面で、障害青年が意味のわかりにくい言葉や漢字などを互いに聞き合って助け合いながら学んでいる」「いつもの活動の場とは違う改まった空間で学んだ体験も自立につながる力になる」「チューターとして参加した学生にとっても新鮮な発見がたくさん得られた良い体験だった」という評価があった。大学連携オープンカレッジは、日程的に学生ボランティアの参加が得られなかったことは残念だったが、障害青年からは大学生たちと一緒に役割を持って講演会をできてよかったという感想があり、それぞれの役割の青年に一言ずつマイクを向けると自分が担当したことを思い出して頑張れたことを率直に述べることができた。

質疑応答では、連携協議会の委員から「もっと皆さんが学習している所を直接見たかった」等の感想や青年全員に一番思い出に残っているのはどの場面かと質問があり、一人ずつそれに答えた。また、法人理事長から「自分の子どもはきっかけがないと参加しにくいのだと思う。特に土日は休みだとインプットしているので声をかけただけでは動かない。利用している事業所を含め、こうした学習の機会に参加しやすくなるきっかけを作ってもらえたら」という意見があった。

成果普及の課題として、次年度も委託を受けることができれば本事業への関心や理解を地域に拡げる意味で外部からの参加者を増やす工夫（マスコミや SNS などを使った情報発信など）に力を入れていきたい。特に地域の教育・福祉行政や関係者には身近な所で実践研究や成果報告が行われていることを文部科学省の協力も得て周知する仕組みを検討することも必要と思われる。

【参考:参加者実績】　成果報告 12/10 全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会第 5 分科会

(A)参加者の属性について

	合計(人)	男性(人)	女性(人)
属性別参加者数	25	13	12
(内訳)			
行政関係者(教育委員会)			
行政関係者(首長部局)			
学校教育関係者(大学等関係者を除く)	2	1	1
大学等関係者	1	1	
公民館等社会教育施設関係者			
社会福祉法人関係者	2	1	1
NPO法人関係者	1		1
企業関係者(商工会等含む)			
保護者団体関係者(親の会・手をつなぐ育成会等含む)	4		4
障害青年	15	10	5
運営事務局関係者			

(B)メディアインパクト(報道等での周知状況)

	件数
新聞	0
ラジオ	0
テレビ	0

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

【参考:参加者実績】 成果報告会 2/16

(A)参加者の属性について

	合計(人)	男性(人)	女性(人)
属性別参加者数	32	17	15
(内訳)			
行政関係者(教育委員会)	1		1
行政関係者(首長部局)	1		1
学校教育関係者(大学等関係者を除く)	2	1	1
大学等関係者	4	4	
公民館等社会教育施設関係者			
社会福祉法人関係者	1	1	
NPO法人関係者	2	1	1
企業関係者(商工会等含む)			
保護者団体関係者(親の会・手をつなぐ育成会等含む)	1	1	
障害青年	16	8	8
大学生・院生ボランティア	3	1	2
運営事務局関係者	1		1

(B)メディアインパクト(報道等での周知状況)

	件数
新聞	0
ラジオ	0
テレビ	0

※該当がある場合、別途参考となる資料を添付のこと。

7. 本実践研究事業の実施により得られた成果・効果

（自立や社会参加・就労等に関する具体的なエビデンスに基づく成果・効果）

（事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット）

※数値を用いる等して具体的に記載すること

（事業の実施により直接的に得た成果／アウトプット）

※数値を用いる等して具体的に記載すること

本事業における成果＝評価については、当事者のアンケートをとった（「公開講座」では、出来るだけ数値化することを試みた）。

また、「公開講座」と「大学連携オープンカレッジ」について、学びの主体である当事者による振り返り＝成果発表会を二度にわたって開催した。

1. 公開講座

（第 1 回アンケート結果）

①	グループでの話し合いは	楽しかった	15	普通	3	つまらなかった	0
②	グループ内で自分の意見が	言えた	12	少し言えた	6	あまり言えなかった	0
③	あなたの「Happy」を見つけることができた	できた	15	少しできた	4	あまりみつけられなかった	0
④	グループの発表は	うまくできた	13	少しできた	5	あまりできなかった	1
⑤	講座のすすめ方は	よかった	16	普通	3	よくなかった	0
⑥	感想やリクエスト						

A	いろんなかみでもじを書いてるのが、1 番よかったとおもいます。 本当にありがとうございました。
B	楽しかった。 難しかった。
C	いつもとちがうメンバーではなしあうのもいいとおもいました。
D	すごくたのしかったです。 またよかったら、るっくにきてくだし。きたら、じしゅせいひんのほうにきてください。きにいったらそこで、はんばいします。
E	うまく発表をできて、良かったと思いました。 ほかのグループの発表を上手にできていました。
F	自己紹介している時、中日やジャニーズの話を聞いてよかったです。
G	各グループで話し合いが円滑にできたようでよかった。 もう少し自己紹介や発表の時間を多くとれると、よりいいものになるかと思われる。 次回も 1 参加者として関わりたいですので、よろしくお願いいたします。
H	色々人の意見を聞けたこと
I	グループの話がもりあがって、聞いててたのしかったです。
J	意見がきけてたのしかった。 また参加したいです。
K	しあわせでした。 参加者の皆さんがしっかり書いていたのが印象的でした。
L	今日みんなではなしをしたりきんちょうしたけど楽しかった。
M	ふだん、自分のHappyを考えないからこういうきかいに、自分がHappyだったことを思い出して書くのが良いと思いました。

N	自分の体験を誰かに聞いてもらって共感を得られるのはとても貴重なこと。私も嬉しかった。 みなさんが嬉しそうに話していたりたくさん書いている姿を見てハッピーが共有できた気がした チューターの方がやさしく合づちを打ってくださったので、参加者の方も安心して話ができていたと思う。
O	いろんな話をきけてよかったです。 久しぶりの講座は、とても楽しかったです。自分が楽しかったことを話すことができてよかったです。
P	いろんな人のしあわせだった事をきけて楽しかった。
Q	僕はみんな前できんちょうせずに、自分の好きなことが言えて良かったです。
R	過去を振り返ったことでHAPPYになれました。 HAPPYな思い出は私の一生の宝物です。 すごく楽しいひとときを過ごせて嬉しかったです。次回も楽しみにしています。

（第 2 回アンケート結果）

①	グループでの話し合いは	楽しかった	16	普通	4	つまらなかった	0
②	グループ内で自分の意見が	言えた	15	少し言えた	4	あまり言えなかった	1
③	あなたの「Happy」を見つけることができた	できた	17	少しできた	3	あまりみつけられなかった	0
④	グループの発表は	うまくできた	17	少しできた	2	あまりできなかった	1
⑤	講座のすすめ方は	よかった	15	普通	5	よくなかった	0
⑥	感想やリクエスト						

A	私として、できました。 私たちでやりつづけて行きたいと思います。
B	楽しかった。
C	夢のはなしをここまでねっしんにかんがえれたのがよかったです。
D	たのしかったので、こんどは、やきゅうのはなしをしたいです。
E	他のグループの人と発表を聞いて良かったと思いました。
F	僕はバッティングセンターにしました。 京田のヒットと大谷のホームランをめざして頑張りたいと思います。
G	発表時、ZOZOTOWNの社長のくだりに対する反応が微妙でしたが、宮地さんが笑ってくれて何よりでした。
H	
I	自分の夢のことを考えれてよかったです。
J	今回、自分の夢を発表することがでkました。 自分の夢を実現するためにみんなで話し合うことができました。
K	「夢」をなかなか書き出せなかった人も、最後に自分の「夢」を書くことができた。 身の回りの「夢」を自覚することは、まず、大切なことだと思う。 相互作用としてがくしゅうはせいりつしていたとおもう。 今回欠席された方は、どうやって答えるのかと思ったりしました。
L	今日もみんなとおはなしができてたのしかった。

	M	みんなの夢を知れたのが良かったです。 私の夢をみんなで考えたのもよいと思いました。
	N	みなさんの夢とそのきっかけを聞くことができてとても充実した時間でした。 夢からプロセスへと具体的な形にするのは難しいかもしれないけれど、文章にすることで、自分の中に眠る気持ちに気付くことができたのならば、良い経験になったんだろうなと感じます
	O	夢について考えられよかった。
	P	みんなのゆめやたどりつくまでのだんどりがきけて楽しかった。
	Q	今日はおちついたかんじに話し合いができてよかったです。
	R	余り夢を話すことがなかったので、今回夢を語れて嬉しかったです。 実現の為に周りの方にも協力してもらいながら努力していきたいです。 有難うございました。次回も楽しみにしています。
	S	グループでの話し合いは楽しかったです。

（第 3 回アンケート結果）

①	北欧の教育について	よくわかった	8	わかった	10	わからなかった	1
②	グループ内で自分の意見が	言えた	12	少し言えた	5	あまり言えなかった	2
③	グループの発表は協力して	うまくできた	12	少しできた	6	あまりできなかった	1
④	講座のすすめ方は	うまくできた	16	少しできた	2	よくなかった	1
⑤	来年度公開講座でやりたいこと	・電車の勉強がしたい。 ・鉄道関係 ・心理テスト ・スポーツの講座 ・ストレッチとか					
⑥	感想やリクエスト						

	A	修了証をもらってよかったと思います。
	B	日本いがいの外国のしょうがいしゃのための大学をしることができました。
	C	今日はデンマークのことをついて勉強をして楽しかったです。 後は、アイスランドをいっぱい書いていました。良かったと思いました。
	D	スェーデンの話でスポーツが出てよかったです。
	E	1人1人が意見を気軽に話し合える雰囲気でよかったです。
	F	同年学生さんと交流できてよかった。
	G	フォンビィ国民大学の楽しそうな大学生活がきけてよかったです。
	H	また参加できたら参加しようと思います。
	I	楽しく学べました。 皆さんの[学習の構え]ができていることにとても感動しました。
	J	こうかいこうざを 3 回行きました。みんなでおはなしをしたりできてたのしかったです。
	K	出来事（今までの出会いや学んだこと）と将来の目標をつなげて、人生のキャリア・デザインに工夫することが一番重要であると思います。 ふりかえりのやり方が大事、受講生のふりかえりを指導していただけたらと考えます。
	L	楽しかったです。
	M	ほかのしょうがいしせつについていろいろしれてよかった。

	N	なかなかみなさんと一緒にすごすことがないので良かったと思います。
	O	チューターさんのKさんにも逢えなくなるのがさみしいです。 毎回楽しみに参加していました。次回の公開講座も楽しみにしています。
	P	たのしかったです。
	Q	スェーデンの取り組みの話を聞いて良かったと思いました。 日本以外でもこういう場所があったことを初めて知ることができました。

公開講座では、日頃、自分たちが思っていることや感じていることをそのまま出しあって話し合った第1回・第2回と、講義に基づいて話し合いを進めた第3回目とでは、受講生の障害青年たちの反応は、若干異なるとはいえ、自分のことが言えた、聞いてもらえた、楽しかったという声が多く聞かれた。ここからは、みんなで楽しく学び合うことの大切さと必要が明らかにされている。

2. 当事者による成果発表会

2018年12月09日、第15回全国専攻科(特別ニーズ教育)研究集会和歌山大会の「第5分科会 青年達が語り合う分科会」で、見晴台学園専攻科生徒2人と見晴台学園大学学生2人が、「公開講座と大学連携オープンカレッジの成果報告」を行なった。また、2019年2月16日、愛知県立大学サテライトキャンパスを会場に、「学校卒業後の学びを求めて」をテーマに、見晴台学園専攻科と見晴台学園大学学生の当事者を中心に、各事業担当の連携協議会委員と学生・院生等による「2018 年度実践報告会」を開催した。

「公開講座」について、「はじめて会う人もいるなかでお互いのハッピーなエピソードに気持ちがほっこりしたり日常のすごくちっぽけなこともハッピーに思えるようになったりすごく楽しい時間が過ごせた」「自信をもって自分の夢を話すことは勇気がいるけれどなかなかない機会なのでみんなに聞いてもらえてうれしかった。夢があっても、どうしたら叶えられるか知らないこともあったのでいろいろな人からアドバイスを聞いて知れてうれしかったし夢を叶えるためにがんばろうと思えた。自信をもって自分の夢を話すことは勇気がいるけれどなかなかない機会なのでみんなに聞いてもらえてうれしかった。夢があっても、どうしたら叶えられるか知らないこともあったのでいろいろな人からアドバイスを聞いて知れてうれしかったし夢を叶えるためにがんばろうと思った。」「3 回の公開講座を終えて、過去のことをふり返ることもそれを誰かに伝えることもないことなのではじめは緊張したけど、参加している人みんなが共感してくれたり、『すごいね』と言ってくれたりしてとてもうれしかった。チューターの学生やほかの大学の先生など普段関われない人と交流できたこともいい経験になった。」「修了証がもらえたことも普段、場所は近いけどなかなかいっしょに勉強できない見晴台学園大学の人やちがう大学の人たちといっしょに勉強したり話を聞いてもらったりなかよくなれたこともうれしかった。」と発表した。

また、チューターとして参加した学生・院生は、「誰も排除しない空間というのは、障がいの有無で対応することではなく、一人一人がどのような困難を抱えているのか、まずはそれを互いに理解し、歩み寄ることから作られるのだと感じた。」「同年代の障害を持つ方々と関わる機会をいただき、そうした方々の抱える困難や思いに触れたことで改めて気付く、感じる、考えることがたくさんあった。」「講座への参加を通して、こうした場において、まずはどのような発言も真面目に、敬意をもって受け止められる雰囲気が大切であることを改めて実感した。今後、障害をもつ人々の生と教育、そして社会自体のあり方についてより理解を深められるよう学んでいくとともに、今回のような交流の機会があれば、積極的に参加していきたい。」と発表した。

「大学連携オープンカレッジ」について、「ぼくは、オープンカレッジの実行委員会にも参加しました。オープンカレッジは公開講座とは違って、地域の大学に通う学生さんたちといっしょに企画をしたり、ぼくたちも同じように役割をもって会をすすめたりします。たくさん学生さんがいる中で、とてもきんちょうしまし

た。学生さんたちと、同じことをしていることが自分でもすごいなと思ってがんばれました。」「1 回目のオープンカレッジでは、2 回目のオープンカレッジに向けての準備をしました。2 回目は書道家の金澤翔子さんとお母さの泰子さんを招いて、大きな書を書いてもらったり、お母さんの講演を聞きます。金澤翔子さんの紹介ビデオをみたあと、当日の役割分担をしました。役割分担のあとは、翔子さんや泰子さんへの質問を出し合いました。書道をはじめたきっかけや今まで書いてきた作品で 1 番好きな文字は何ですか、書いている間には何をかんがえていますか、など書道家としての翔子さんへの質問のほかにも、休日の過ごし方や得意料理、好きなアイドルなどプライベートの質問もありました。」「翔子さんは、一人暮らしを始めるなど忙しいのにたくさん努力していることが分かりました。私もヘルパーさんに助けてもらいながら一人暮らしをしているので、翔子さんの質問のこたえやお母さんの話を聞きながら、障がいがあっても関係なく、やりたいことをやってみたり、努力したりすることの大切さを学びました。」「私は高校を卒業してから12年間働いていて、もう 1 回学びたいと思って見晴台学園大学に今年入学しました。文部科学省の委託事業として、たまたま今年度から公開講座やオープンカレッジがはじまったそうですが、私はすごく楽しかったです。これまでの学習と違って、いろんな人と自分のことを話したり、相手のために話し合ったりするのが新鮮でした。」と発表した。

以上を通して、同世代の青年同士の「共に学び」「共に生きる」学び合いが、お互いの人間的成長に大きな教育力を発揮し、障害青年の自立や社会参加に不可欠であることが理解できた。また、この事業に取り組んだ大学教員は、同世代の障害青年や他大学の学生との学びあう姿に接する中で、障害青年を含む学生の見方が広がるとともに、授業内容など教育活動を工夫すれば能力など幅のある青年たちが共に学ぶことは可能であることを実感し、大学教育のあり方について意識変革をもたらした。

本事業の実施により、移行期の障害青年に必要とされる教育の成果＝直接的に得たい成果／アウトプット目標として、以下の3点を掲げた。

①学校卒業後も「学ぶことが自分を豊かにする」ことを感じ取り、学習の主体者として積極的に生きていく力の獲得につながる。

②学習要求を持つ障害青年の組織化により共に学ぶ仲間ができる。

③多様な人（同世代、異年齢、健常者、等）とのつながり、学習活動を通して共生社会の活動に参画する。

また、**「視察研修」**では、連携協議会委員は、自らの地域では知る機会のなかった学校卒業後の障害青年の「学校から社会への移行期」の学びの実際について、訪問することによって、具体的に理解を深めることができるとともに、各自の地域や持ち場で、何ができるかを考えるきっかけとなった。

以上から、本事業の目的は、十分に達成したと思われる。引き続き、この事業を継続し、さらにその経験を積み重ねていくことが重要である。このことによって、確実に障害者の自立や社会参加、就労に向けた人間的土台をより強固なものに形成していくこと、そして、このような障害者の学びを支援する地域の場づくりが着実に広がっていくことが期待できる。

（事業の実施により終了後（中長期的）に得たい成果／アウトカム目標）

※数値を用いる等して具体的に記載すること

1.公開講座（生涯学習セミナーに改める）

①法人事業として、恒常的に、年 3 回実施する。ここでは、障害者の年齢を超えて、共に学びあえる内容を工夫する。

②上記においては、地域の大学と連携し、学生・院生をチューターに、実行委員会を組織して取り組む。

2. 大学連携オープンカレッジ

① 地域の各大学間交流と個別交流についての共に学ぶ、「共同学習」を恒常化するために、法人と各大学間で提携協定を結ぶ。

② 上記をもとに、実行委員会を組織化する

3. 視察研修

① 連携協議会委員の組織母体と「障害者の学びの場づくり愛知県連絡協議会」（仮）を結成し、日常的に情報交換など交流する。